

平成22年5月19日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008年度～2009年度

課題番号：20800002

研究課題名（和文） 貧困世界におけるスポーツ・コミュニティ生成の社会学的研究

研究課題名（英文） A Sociological Study of Sport Community in Depressed World

研究代表者

石岡 丈昇（TOMONORI ISHIOKA）

北海道大学・大学院教育学研究院・助教

研究者番号：10515472

研究成果の概要（和文）：

マニラ首都圏・パラニャケ市のEボクシングジムのフィールドワークを通じて、スポーツを通じた生活保障空間形成が達成されている点が明らかになった。これは、「スポーツと社会移動」というテーマで研究を進めてきたスポーツ社会学の内外の研究に対し、「スポーツと暮らしの再生産」のテーマから事例分析を構想することの必要性を訴える含意を備えるものである。

研究成果の概要（英文）：

Through ethnographic research at boxing gym located in Paranaque city, the author elucidates a total social fact which sport space changes its mechanism to life protection space. The fact has implications in the paradigm of Sociology of Sport. That is, sport sociologists should consider the theme of “sport and life protection/reproduction” instead of “sport and social mobility”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,370,000	411,000	1,781,000
2009年度	1,020,000	306,000	1,326,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,390,000	717,000	3,107,000

研究分野：スポーツ科学

科研費の分科・細目：スポーツ社会学

キーワード：受肉、スポーツ・コミュニティ、生活実践

1. 研究開始当初の背景

スポーツ社会学の研究史を振り返れば、1980年代のコミュニティ・スポーツ論に代表されるように、スポーツが形成する社会関係の実態を実証的に解明する視座は、学界の中心的な問題構制であった。しかしながら、

スポーツ集団に特化した「閉じた」実証的視角を備えていたために議論が行き詰まり、その学史的反省を経ないまま、一方ではメディア研究やジェンダー研究領域での解釈学的考察が登場し始め、他方ではスポーツ政策論として総合型地域スポーツクラブの考察が

展開されるようになった。

こうした百花繚乱状態にある日本のスポーツ社会学を、再度、社会関係論の視座から実証的に再構成する必要がある。本研究は、こうしたスポーツを通じた社会関係創出を、社会的諸関係が最も分断されているとみなされる、第三世界のスクオッター（不法占拠地区）を事例に論じるものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、フィリピン・メトロマニラのボクシングジムの事例から、貧困世界におけるスポーツを通じた生活保障集団生成の可能性を探ることである。

3. 研究の方法

1) 引退ボクサーのセカンドキャリアの実証的調査、2) ボクサーの所帯構造調査、3) メトロマニラの都市構造のセンサス分析をおこなう。

4. 研究成果

1) 引退ボクサーのセカンドキャリアについて

引退ボクサーの社会的経路は大きく分けてふたつある。ひとつは出身村に帰るといふものであり、もうひとつはマニラ首都圏に留まってボクシング以外の職を探すというものである。厳密に言えば、このふたつは明確に分けられるものではない。というのも、出身村に戻った元ボクサーが結局そこで何もすることがなく、再度マニラ首都圏へと出戻る事例が頻繁に見られるからである。よって、出身村に帰ったとみなすケースを、さしあたり、その後も現在までマニラ首都圏へと出直すことなく村に居続ける場合と定義して、上記ふたつの事例数をまとめてみよう。

そうすると、2002年から2008年の間にEジムをリタイヤしたボクサー36名のうち、13名が帰村、19名がマニラ首都圏で職探しとなる。そしてどちらの範疇にも属さないケースが4名—これらはすべて他ジムで現役を続行するジム移籍の事例である—となる。

マニラ首都圏で職を探した引退ボクサーのなかで、重要な職の獲得法は、ジムマネージャの紐帯を利用して、ジムのトレーナーになることと、マネージャのサイドビジネスであるレストラン経営の分野でウェイターやキャッシュ係として職を得ることである。ここではまず、19名がジムを出た後にどこに居住していたかを見ておこう。19名中、マニラ首都圏近郊のカピテ州に両親が家を所有している2名を除いて、残りの17名全員がスクオッターに暮らしていたのである。引退すればジムに住み込み生活をすることは原則的にできなくなるが、そのときの彼らの

居住先がスクオッターへと連なっていることがここからはわかる。

ところで、ボクサーがスクオッターに住み始めるのは、必ずしも引退後の職探し過程においてのみに限定されるわけではない。第2章でも触れたように、妻や子を抱える現役ボクサーはジム外に所帯を構えるが、そこでもスクオッターが彼らの居住先として選ばれる。

たとえば、2002年から2008年まで現役ボクサーとして活躍しているラフィは、2002年11月よりジム外のスクオッター（フォースエステイト・グリーンビル）に家屋を借りて暮らしていた。その後、彼はファイトマネーを蓄えた資産によって、同じスクオッターエリア内に新居を建設し始め、2005年6月には二階建て家屋の一階部分ができあがった。二階部分はその後に試合をおこなう度に増築するかたちで、彼の所帯は一階部分のみで暮らし始めた。2007年7月には二階部分も完成し、彼は二階建て家屋をスクオッター内に「所有」したのである。ラフィが2005年6月まで借りていたスクオッター家屋は、その後、ジムの同僚のロセリトが借り受けた。ロセリトは妻とふたりの子どもを抱えていたが、彼は2005年6月までは単身でジムに住み込みで暮らしていた。妻子は彼の出身地であるセブ市で、ロセリトの両親と同じ所帯を形成していた。しかし、セブ市に向向していたオーストラリア人ビジネスマンが自らの妻に言い寄っていることを知ったロセリトは、妻子をマニラ首都圏に呼び寄せることを決断した。このとき、彼はラフィがそれまで住んでいた家屋を借りて、そこで生活を始めたのである。

ラフィやロセリトの事例からは、現役ボクサーであっても、家族事情に応じて、ジム外の暮らしを選び取ることがわかる。ステインからステイアウトへの移行局面については、ボクシングを引退後にスクオッター暮らしを開始する者、また現役中でありながら家族事情に応じてスクオッター暮らしを始める者とふたつのパターンがある。だが同時にここには、これらふたつの局面を貫く社会的事実が見出される。それは<ジムからスクオッターへ>という移行を彼らが共通して経験することである。

2) ボクサー所帯の所帯構造調査について

マニラ首都圏のスクオッターは、単身男性が大多数を占めるアフリカ型のスクオッターとは異なり、女性や子どもを交えた所帯が形成される点に特徴がある。単身男性が大多数を占めるアフリカのスクオッターは、松田素二がナイロビの事例を詳細に報告しているように、一定期間の都市での出稼ぎ生活を経た後は母村へと帰る人びとを担い手とす

る(松田 1996)。それに対しアジアのスクオッターは、村落からの出郷後、都市に所帯を形成しそこで子どもも養育するなど、都市に定着する人びとによって構成されると言われる(青木 1996)。ここでアフリカとアジアという非常に漠然とした地理区分を持ちだしたのは、マニラ首都圏のスクオッターを考察する上で、そこで営まれている所帯生活に注目する必然性を確認しておくためである。アフリカ都市研究がもたらした理論的成果であるパーソナルネットワーク論のような個人に注目する視角ではなく、所帯という個人を超えた集合体に分析の基礎単位を置く視角を取るのには、こうした現実との即応関係の下での筆者の理論的選択の結果である。

さて、E ジムボクサーであるラフィの事例を取り上げ、マニラ首都圏のスクオッターにおける所帯内実について考察を進めよう。ラフィ所帯は4人で構成されている。①ラフィ(所帯主: 31歳)、②タタ(配偶者: 22歳)、③シーセル(長女: 1歳)、④ミカエラ(配偶者の妹: 18歳)、である(2005年6月の時点)。すなわち、一組の夫婦とその子、これに姻戚の親族がひとり加わった形態である。日常生活では、ラフィはボクサーとして朝のロードワークとトレーニング、昼のジムワークに出かける。また妻であるタタは、この時期に幸運にもデパートでの短期契約職を手にし、売り場で接客をしていた。この間、娘のシーセルのベビーシッターを担っていたのがミカエラだった。妻のタタが、6か月の契約が終わり、自宅で主婦としての雑務をこなしている期間も、ミカエラはベビーシッターとしてラフィの家に留まり暮らしていた。

その後、ミカエラがミンダナオ島のスルタン・クダラト州の母村に暮らす両親の家を手伝いとして呼び戻されマニラ首都圏を離れた際(2007年3月)、今度はタタの別の妹である⑤ジョベリン(この時点で18歳)がラフィの家にベビーシッターとしてやってきた。ミカエラもジョベリンも高校を卒業していたが、ミンダナオでは職がなく、そこでは家事手伝い以外に職もないことから、マニラ首都圏にやって来てラフィの家でベビーシッターをしていた。同時に、彼女たちはマニラ首都圏で職を探していた。その後ジョベリンは、マニラ首都圏でオフィス事務の雑役の短期契約職を得た。そして、彼女は、職場に近いタギグ市のフォース・ボニファシオのスクオッターに住む友人宅で居候生活をはじめ、ラフィの家を出ていくことになった。ジョベリンが家を出た後の2007年11月、今度はラフィの妹である⑥ペンペン(この時点で17歳)とタタの従弟にあたる⑦フェデル(この時点で18歳)がミンダナオ島からラフィの家にやって来た。2007年の

7月より、ラフィたちは自宅一階でサリサリストアを開始していた。妻のタタが自宅外で職を得ることが難しそうであると判断し、彼らは自営のサリサリストア経営に着手したのだった。サリサリストアの店番および娘のシーセルのベビーシッター役として、ラフィの妹とタタの従弟が新たにラフィの家に来ることになったわけである。

さてこのように構成員の変化も含めてラフィの所帯を捉えると、次の事実がわかる。それは、①ラフィ、②タタ、③シーセルという「一組の夫婦とその子」という単位は、この3年間ほどの間に一貫してフォースエステイトの自宅に住んでいるが、④ミカエラ(配偶者の妹)、⑤ジョベリン(配偶者の妹)、⑥ペンペン(所帯主の妹)、⑦フェデル(配偶者の従弟)といった親族成員は、ラフィ所帯への参入状態が一時的なものである。つまり、所帯構成の内実は、「一組の夫婦とその子」を基礎にし、その単位で補充しきれない生活課題—たとえば娘のベビーシッター—に対処するために、親族をひとりないしはふたり呼び寄せてマニラ首都圏での所帯生活を成り立たせている論理が浮かび上がる。そして、あわよくば、この呼び寄せた親族が、マニラ首都圏で何らかの職を獲得することも同時に期待して、この呼び寄せはおこなわれている(ジョベリンの例)。すなわち、親族の呼び寄せは、ラフィ所帯の生活を成り立たせると同時に、呼び寄せた親族がマニラ首都圏で職を獲得し経済的に自立することを期待するという二重の意味を帯びた行為としてある。

3) メトロマニラの都市構造の分析について
マニラ首都圏の人口増加は、1960年代以降、急激な伸びを見せ、首座都市特有の空間構造をつくり上げてきた。マニラ首都圏の人口は1960年に246万人であったのが、2000年には993万人に膨れ上がった。この期間にマニラ首都圏全体の人口は約4倍になった。人口推移を人口増加率で示したのが表2-2である。1960年の人口数を100とした上での2000年までの人口増加率が最も高いのは南部のラスピニャス市であり、29倍以上の増加率を見せている。続いて、同じく南部のタギグ町、ムンテインルーパ市となり、さらに北部のバレンズエラ市となっている。1903年にマニラ首都圏人口の67%を占めていたマニラ市、それに隣接するサンファン市、パサイ市、マンダルーヨン市といったマニラ首都圏の地理的中心部は、近年の人口増加率が低く抑えられている。ここからわかることは、人口増加の郊外化が昨今生じていることである。

マニラ首都圏の人口増加をめぐって、中西徹は3つの類型化をおこなっている(中西

2000)。①1960年までにはほぼ飽和状態に達し、その後はほぼゼロ成長であった市町、②1960年代から80年代までの期間で成長が著しく、その後、成長にブレーキがかかった市町、③1980年代以降、やや遞減傾向が見られるものの、ほぼ一貫して高い成長率で人口増加してきた市町である。先に見た1960年以降の人口増加率の著しい市町は、ほぼすべてが③の類型に当てはまるものである。

①の類型にはマニラ市が該当する。マニラ市は1980年には人口160万人、人口密度は1km²で4万人を超えており、飽和状態になっていた。これに対し、②の類型には、マカティ市、マンダルーヨン市、バサイ市、パシグ市、サンフアン市、パテロス町、マリキナ市となっている。パテロス町とマリキナ市を除くと、これらの市町はマニラ首都圏内で比較的早くから開発が進んできた地域であり、マニラ市と同様にすでに80年代には人口が飽和状態にあったものと考えられる。

パラニャーケ市の人口増加率は72.6%と17市町の中で8番目となっている。パラニャーケ市は、地理的には、マカティ市やマニラ市といったマニラ首都圏の地理的中心地と昨今人口増加の著しいラスピニャス市など周辺部との中間に位置する。1960年以降、人口増加は右肩上がりだったものの、その増加率は隣接するラスピニャス市などと比べ、低く抑えられてきた。

次に、2000年のセンサスを用いて、年間家計支出別にマニラ首都圏の行政区を分析すると、支出額が多いのがマカティ市(423,023ペソ)とケソン市(354,918ペソ)である。最も支出の高いマカティ市は、1960年代にフィリピンを代表するアヤラ財閥によって開発がなされ、現在はマニラ首都圏の首都機能の大半をそこに集中させている。マカティ全面積の50%以上を占める900ヘクタールの土地がアヤラ財閥の所有であり(津田1989:132)、アヤラ・アベニューという通りに沿って、巨大ショッピングモールや超一流ホテル、大企業本社があり、それを囲むようにゴルフクラブまで備えた住宅街が広がっている場所である。ケソン市は、フィリピン大学やアテネオ大学といったフィリピンを代表する大学があり旧首都でもあった。このふたつの市に続いて、サンフアン市(289,799ペソ)、ラスピニャス市(286,637ペソ)、パラニャーケ市(273,313ペソ)となっている。パラニャーケ市はマニラ首都圏の17の市町のうち、5番目に家計支出が高い地域としてある。

一方、マラボン町(146,787ペソ)、カロオカン市(171,030ペソ)、ナボタス町(131,599ペソ)、バレンズエラ市(180,662ペソ)など、北部の郊外地域の支出額は低い。これらの市

町は、マカティ市やケソン市の数値を比べると、支出の数字が2分の1から3分の1である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

・石岡丈昇、「貧困世界におけるボクシング」『センズの社会的構成—opus operatum からmodus operandiへ』『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第107号、pp71-106、査読無、2009年

・石岡丈昇、「書評：菅原和孝編『フィールドワークへの挑戦』、武田丈・亀井伸孝編『アクション別フィールドワーク入門』、『社会と調査』第2号、p98、査読無、2009年

・石岡丈昇、「チャンピオンスポーツの光と影—常態としての『敗者の生産』」、『体育の科学』第60号、pp323-327、査読無、2010年

〔学会発表〕(計2件)

・Tomonori Ishioka, The social and sensual logic of boxing in contemporary MetroManila: Towards a sociology from the urban poor, *International Sociology of Sport Association 5th World Congress*, Kyoto University, July/28/2008

・石岡丈昇、「シカゴ・ハイパーゲットーにおけるボクシング・ハビトゥスの社会的構成—ロイック・ヴァカンの『身体からの社会学』」、『第81回日本社会学会大会』、東北大学、2008年11月24日

〔図書〕(計1件)

・井上俊・伊藤公雄編(石岡丈昇ほか共著)、『社会学ベーシックス4 都市の世界』世界思想社、2008年、pp209-218

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石岡丈昇 (TOMONORI ISHIOKA)

北海道大学・大学院教育学研究院・助教

研究者番号：10515472